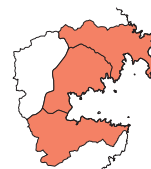


自分がやらないで誰がやる

～建設会社の社員たち～



▲震災翌日から地元の建設会社の重機が瓦礫の町で稼働し続けた。

写真提供 阿部藤建設

瓦礫と化した町で、即座に動き出したのは地元の建設会社の社員たちだった。建設会社の多くが被災した中で、社員たちは誰の指示を受けることもなく、無傷で高台に残った重機を出動させた。

間もなく到着するであろう緊急車両や救援車両が通れるように一刻も早く道を作らないと、助かる命も助けられなくなってしまう。自分の家族の安否すらわからないまま、作業に取り組んだ社員もいた。

津波で壊れた建物等の残骸で塞がれた道路を開く作業経験はない。もしかしたら瓦礫の下に誰かが倒れているかもしれず、細心の注意が必要だった。しかし、「自分がやらないで誰がやる」。突き動かすのは、プロとしての意地と使命感だった。

地元の建設会社は日頃から、町内の道路や河川等の建設や保守に関わっていることから、これらのインフラを災害から守るのは、縁の下力持ちとしての自分たちの責任と考えていた。建設会社の人々は、『地域インフラの町医者』を自称している。彼らは最前線で動き続けた。